

編／集／後／記

●はるか遠くを見る、はるかに遠くから見る。自らの文化を認識し、理解するために、他者の視点から見ることを学ぶ。レヴィストロースは世阿弥の「離見の見」に触発され、その著書『はるかなる視線』（1983）をまとめました。

1977年の初来日から25年。93歳の文化人類学者の遠き視線は、「文化間の対話を成り立たせる唯一の健全な基礎」たる「最もプロパガンダから遠いもの」（本号書簡）としての国際交流基金の現在に、あらためて注がれています。われわれの健全なる基礎は、30年を経ていかなる地平を拓いたか。これから続く年月、いかなる視線がわれわれに返ってくるか。基金職員全員の知恵と熱意の結集ともいふべき本号が、その答えを導くものとなることを望んでやみません。

（奈）